

# 「人生を変えた映画」

映画字幕翻訳者 戸田奈津子 VS 中央大学学長 鈴木康司



戸田奈津子さん プロフィール

日本語字幕翻訳の第一人者として映画ファンの間でも人気の高い戸田奈津子さん。手がけた作品は総数千本を越え、毎年新たな映画の翻訳を続けている。東京都出身。津田塾大学英文科卒業。保険会社を一年で退社、フリーで映画会社の通訳などを務める。後に字幕翻訳家の清水俊二氏に手ほどきを受け、72年、「仏映画」 「小さな約束」で本格的な翻訳活動に入る。以後「地獄の黙示録」「E.T.」「フィールド・オブ・ドリームズ」「エビータ」「バック・トゥ・ザ・フューチャー」など数々のヒット映画を手がける。最近の作品は「プライベート・ライアン」「ジョー・ブラックをよろしく」など。1992年第1回淀川長治賞。1995年ゴールデングローリー賞を受賞。

鈴木康司学長 プロフィール

専門は17・18世紀のフランス演劇で、モリエールを始めとする古典喜劇の権威とされ、マリヴォー他多数の翻訳がある。東京大学に提出の博士論文「下僕像の変遷に基づく17世紀フランス喜劇史」が学界から高い評価を受けたばかりかボーマルシェの評伝『闘うフィガロ』では芸術選奨文部大臣賞を、『スタンダード和仏辞典』（共著）では、毎日出版文化賞を受賞した。近刊に『わが名はモリエール』がある（いずれも大修館書店刊）。

学長としてやや異色の経歴としては、パリ国際大学都市日本館の館長を84年から2年間勤めたことが、フランス始め世界中の国から来た館長と付き合い、役職上フランス国際交流基金日本部門の管理及び専門委員、日本政府給費留学生試験の委員長などを歴任、教育功労賞オフィシエを貰った。

趣味は芝居・オペラ観劇、映画鑑賞、相撲観戦。戦前の国技館に枱席を持っていた父上のお蔭で全盛期の双葉山時代からずっと本場所を見つづけているとか。その縁で出島や玉春日を輩出した相撲部の部長も勤めている。



## 対談取材レポート

この対談を企画させていただいたきっかけは、鈴木学長のホームページに「鑑賞雑記」というページがあったからです。ごらん頂いた方もいらっしゃるかと思いますが、このページでは、鈴木学長がご覧になった映画や演劇について、ご自身の感想を自ら書いていらっしゃいます。その視点は、我々が読んでいても分かりやすく、記憶に残る事が多いものです。そこで、今回は、鈴木先生が大好きな映画について、実際の声で熱く語ってもらい、映画の魅力とそれを語る鈴木先生のお人柄を、皆さんに感じ取っていただけたらと思い、番組として企画したしだいです。当初、この我々の狙いを十分に引き出していただける方を探していたところ、昨年、中央大学で講演いただいた映画字幕翻訳家の戸田奈津子さんの名前が浮かびました。このお二人の対談なら、きっと映画の魅力を思う存分引き出してくださり、しかもお二人のお人柄も映像を通して表現できるのではないかと確信いたしました。幸い、お二人とも快く引き受けてくださり、今回の対談が実現したしだいです。

映画好きのお二人に、大好きな映画の話を自由にお話くださいとお願いしたところ、お二人とも初めてお会いしたとは思えないほど気さくに、自由にお話を楽しんでくださり、企画した我々もほっとしたと同時に本当に嬉しく思いました。日頃、中央大学の学長という立場で堅い話をする事が多い鈴木先生も、この日ばかりは、映画を見始めたころの青年に戻って話をされていたようです。大好きな映画の話となれば、止めども無く記憶が甦ってきたのでしょう。近くで撮影の様子を見学していた我々が、この話は何時まで続くのだろうと思うほど、泉のごとく湧き出てきました。子供のころの懐かしい思い出が、同世代の戸田さんの映画の記憶と重なり、一気に堰が切れた感じでした。戸田さんも、仕事として現代の映画の翻訳を続けているところから、どうしても最近の映画の話ばかりが話題となっていたようで、久しぶりに昔の懐かしい映画の話ができたことを素直に喜んでくださいました。「昔の話ばかりで良かったのかしら？」と撮影終了後も気にされていた戸田さんの人柄に、我々も暖かさを感じたほどでした。

とはいえ、この対談のテーマ「人生を変えた映画」という題には多少なりとも触れておく必要があるかと思えます。鈴木先生の「人生を変えた映画」は、フランス映画の『美女と野獣』だったそうです。当時アメリカ映画を多く見ていた鈴木先生にとっては、このフランス映画の新鮮さは、驚嘆に値したようです。そこからフランス語に目覚め、フランス文化と真剣に取り組んでいったようです。一方、戸田さんの「人生を変えた映画」は、『第三の男』だったそうです。その詳細は、お話の中からはなかなか取り出しにくいのですが、かつての大スターと現在の俳優さんとの違いを話す辺りに、きっとそのカギが隠されているような気がしました。単なる映画好きの昔話ではなく、きっと皆さんも映画館へ行ってみたいくなる対談だと思いますので、一緒に楽しんでいただければと思います。

(広報課 渡辺記)



撮影前に談笑するお二人　すでに映画の話が始まる